



警告 のニュースレター「角笛」

発行日：2013年8月発行（第40号）

発行：警告の角笛出版

価格：フリーペーパー（無料）

角笛 HP: <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/5614/>

目次：

◎巻頭メッセージ「サルデスへの災い」エレミヤ

◎証「割礼を受ける」E3

◎お知らせコーナー 「黙示録セミナー」

< 巻頭メッセージ >

「サルデスへの災い」 by エレミヤ

本日は、サルデスへの災いとして、この件を見ていきましょう。サルデスは、黙示録に記載されている7つの教会のうちのひとつです。多くの解釈者がこの教会はプロテスタントを指すのでは、と解釈します。私もそう思っています。

サルデス＝プロテスタントととりあえず、理解し、この黙示録の記載を通して終末におけるプロテスタントに関する預言を理解していきましょう。みことばに沿って見ていきましょう。

“黙示録3章3:1 また、サルデスにある教会の御使いに書き送れ。『神の七つの御霊、および七つの星を持つ方がこう言われる。「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、生きていとされているが、実は死んでいる。」”

<サルデスは赤いもの、俗悪なものとなる>

まず、この教会の名前、サルデスという名前ですが意味の秘められた名前です。

その原語の意味合いは「赤いもの」という意味です。なお、以下の「赤めのう」もギリシャ語では、sardinosとして、サルデスと似たような発音のことばが使われています。

“黙示録 4:3 その方は、碧玉や赤めのうのように見え、その御座の回りには、緑玉のように見える虹があった。”

ですので、何しろサルデスというギリシャ語には、「赤い」という意味合いがあるのです。さて、黙示録は封印や謎に満ちた書であり、あらゆることばに隠された意味や、たとえが使われています。このサルデス＝赤いもの、ということばにも隠れたたとえが使われているように思えます。聖書で言う、赤いものとは何かというと以下のことばがそのヒントです。

“創世記:25:30 エサウはヤコブに言った。「どうか、その赤いのを、そこの赤い物を私に食べさせてくれ。私は飢え疲れているのだから。」それゆえ、彼の名はエドムと呼ばれた。

25:31 するとヤコブは、「今すぐ、あなたの長子の権利を私に売りなさい。」と言った。

25:32 エサウは、「見てくれ。死にそうなのだ。長子の権利など、今の私に何になろう。」と言った。

「サルデスへの災い」 by エレミヤ

25:33 それでヤコブは、「まず、私に誓いなさい。」と言ったので、エサウはヤコブに誓った。こうして彼の長子の権利をヤコブに売った。

25:34 ヤコブはエサウにパンとレンズ豆の煮物を与えたので、エサウは食べたり、飲んだりして、立ち去った。こうしてエサウは長子の権利を軽蔑したのである。”

ここでは、イスラエル12部族の先祖であるヤコブ（イスラエル）、そして、その兄であるエサウが登場します。そして、兄であるエサウが、一杯の赤い食物とひきかえに長子の権利を売り払うことが描かれています。そして、そのできごとのゆえに、彼は、エドム、赤いものと呼ばれるようになったことも描かれています。そうです、ここにサルデス、赤いものが登場するのです。

このエサウすなわち、エドム、赤いものが行った行為、一杯の食物と引き換えに長子の特権を売り払ったというできごとは、兄弟2人の間の個人的なできごとにも見えますが、しかし、それはまた未来に起きることの型、預言であり、新約聖書、ヘブル書は、エサウの様な俗悪なものが後の日に出現することを警告しています。以下のとおりです。

“ヘブル12:16 また、不品行の者や、一杯の食物と引き替えに自分のものであった長子の権利を売ったエサウのような俗悪な者がいないようにしなさい。

12:17 あなたがたが知っているとおりに、彼は後になって祝福を相続したいと思ったが、退けられました。涙を流して求めても、彼には心を変えてもらう余地がありませんでした。”

これらのことばから想像できることは何でしょうか？主はプロテスタント教会の終末の日の姿に関連して、信仰の勇者ギデオンだの、イスラエルを約束の地に導きいれたヨシュアなどの名前を用いず、よりによってというか、あろうことか、長子の特権を売り払った赤いもの、サルデス、エドム、エサウに関して語られたのです。このことに関する、警告を正しく見て行きたいとおもうのです。

サルデス、エドム、エサウ、赤いものということばで、この教会に関して暗示されているもの、それは明らかにこの教会が終末の日に俗悪なもの、この世についたものとなる、という警告です。

そして、この様に呼ばれることは、多くのプロテスタントにとっては心外かもしれませんが、しかし、残念ながら、現在のプロテスタントの現状と一致しています。アメリカを始めとしてプロテスタントは、世につき変質しており、今では同性愛者の牧師さえ、教会に登場しています。まさに俗悪なものとなっているのです。

<長子の権利を売ることの意味合い>

エドム、赤いもの、の名前の由来となった、長子の特権を売るとは何を意味するものでしょうか？このことはKJVでは、生まれつきの権利を売り払うと書かれています。生まれつきの権利、このことは、たとえであり、それは、キリストにより、新生し、新しく生まれたものとして受けた権利を売り払うクリスチャン、俗悪なクリスチャンの予表と理解できます。

今のクリスチャンがそのことをどれほど、大切なものとして、受け取っているかは、別として、新生したクリスチャンは神の前に大きな権利を持っています。すなわち、天の御国を受け継ぐ権利、永遠の命を受け継ぐ権利を持っているのです。しかし、終末の日においてサルデス、すなわち、赤いもの、エサウの様に俗悪な歩みをするクリスチャンにわなや揺るがしがおきます。

その結果、プロテスタントは、その教会全体として、長子の特権を売り払うようになります。具体的には、当然受けるはずだった天の御国もまた、永遠の命をも失うようになります。そのことを預言して、聖書はこの教会に対して暗示的なことば、サルデスという名前をつけた、そう理解できるのです。

「サルデスへの災い」by エレミヤ

そのような視点、受け継ぐべき天の御国を受け継がないクリスチャン、という視点で考えると上記ヘブル書のことば、「あなたがたが知っているとおりに、彼は後になって祝福を相続したと思ったが、退けられました。涙を流して求めても、彼には心を変えてもらう余地がありませんでした。」とのことばも意味深いもののように思われます。なぜなら、聖書は神の国を追い出される人々に関して以下の様に述べているからです。

“ルカ13:28 神の国にアブラハムやイサクやヤコブや、すべての預言者たちがはいつているのに、あなたがたは外に投げ出されることになったとき、そこで泣き叫んだり、齒ぎしりしたりするのです。”

神の国へ入ることに失敗した彼らはエサウの様に泣いたり叫んだりするのです。エサウが泣くこともこのことに通じるように思えます。

＜生きているとされているが実は死んでいる＞

「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、生きているとされているが、実は死んでいる。」

主はサルデス、プロテスタントに関して、それは生きているとの名目、建前はあるが、しかし、神の前、キリストの目には、死んだものである、と語られました。このことの意味合いは何でしょうか？考えてみましょう。聖書は死に関して以下の様に述べます。

“エペソ2:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、

2:2 そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。”

2:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——“

ここに、死と生きることに書かれています。そして、ここでいう死とは肉体の死というより、罪過の中で、死んでいた私たち罪びとという意味合いで書かれています。そして、その死んでいた私たちは、キリストにあって生かされる、そう書かれています。

すなわち、かつては罪の中に死んでいたが、しかし、今はキリストにより、あがなわれ、生きる、これが、あるべきクリスチャンの姿、なのです。

しかし、このようなクリスチャンとしてあるべき姿、状況に関してサルデスへのキリストのことばは、辛らつであり、また、この教会のまごうことなき現実、真実の姿を語っています。それは、「あなたは、生きているとされているが、実は死んでいる。」との厳しいことばです。

上記エペソ書にしたがっていうなら、本来クリスチャンは「かつては、罪過の中で、死んでいたが、今はキリストにあって生きている」ものであるが、しかし、サルデス、プロテスタントの現状は、かつては、罪過の中で死んでおり、今も、引き続き罪過の中で死んだ歩みをしている、キリストにあって生きているとは、名目であり、実際は神の前には相変わらず、罪の中で死んだ歩みをしている、そう語られているのです。

なんとも厳しいことばですが、ほかでもないキリストがいわれることばなので、私たちはこのことばを真摯に受け止め、よくよくわが身を振り返り、歩みをただすべきなのです。

あがないにより、生きることは永遠の命に通じ、罪過の中で死の中にとどまることは、永遠の死に通じます。そして、キリストは、サルデスに関して、「あなたは、生きているとされているが、実は死んでいる。」と語りました。言い換えるなら、この教会は永遠の命が危ない教会なのです。このことは、我々が慄然として、深刻に考えるべきことがらです。

“3:2 目をさましなさい。そして死にかけているほかの人たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行な

が、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。”

上記「目をさませ。」とは以下でも使われています。

“エペソ5:14 明らかにされたものはみな、光だからです。それで、こう言われています。「眠っている人よ、目をさませ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストが、あなたを照らされる。」”

ここでは、罪過や死者の中に眠っている人々に対して、「目をさませ」と語られています。ですので、サルデスの教会が罪過や、死の中から、目をさますべく、「目をさませ」と語られていることがわかるのです。

「そして死にかけているほかの人たちをカづけなさい。」

この教会は死んでいる教会であり、さらに他の人たちは死にかけている、すなわち、罪過にどんどん沈みつつあることがわかります。すなわち、終末に向かってますます状態の悪化する教会であることがわかるのです。残念ながら、このみことばによるなら、プロテスタントは、これから決してよくはならないでしょう。むしろ背教は進むのでしょう。

“わたしは、あなたの行ないが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。”

ここでは、サルデス、プロテスタントの問題はその行いにあることが書かれています。上記「全うされた」とは以下で使われているのと同じことばです。

“ロマ8:4 それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。”

ここでは、「律法の要求が全うされる」ことが書かれています。同じ意味合いで、サルデスに対して「神の御前に全うされたとは見ていない。」といわれるとき、それは、神の求められている行いのレベルに達していない、ことを意味するのです。テストで言うなら、合格点に達

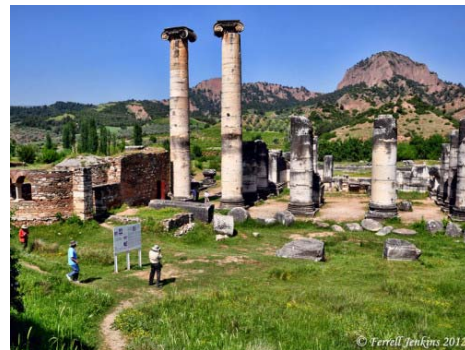
していないことをさすのです。もっと端的にいうなら、サルデスは、神の求められる行いレベルに達しておらず、このままなら、合格すなわち、永遠の命が危ないことが書かれています。行いということばにアレルギーを持つ人もいるかもしれませんが、神の裁きの座においては、私たちはその行いにより、裁かれることを思い出しましょう。黙示録には以下の様に書かれています。

“黙示録20:12 また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。”

20:13 海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのこの自分の行ないに応じてさばかれた。”

現在のプロテスタントでは信仰が異常に強調され、行いに関していわれません。しかし、私たちはその日、おのこの自分の信仰に応じてさばかれた、とは書いておらず、逆に自分の行いに応じてさばかれた、ことが書かれていますので、行いをただすことに意を用いましょう。ヤコブが以下で語っているように行いのない信仰は人を救うことができないのです。

“ヤコブ2:14 私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。”



サルデスの教会

そのようなわけで、神の御前にサルデス、プロテスタントとは、行いが全うされていない、すなわち、合格点に達していない、そしてその結果、救いが危ない、もっとはっきりいうなら、天の御国が危ない教会だと、警告されていることを正しく理解しましょう。行いが全うされていない、不足である、このことは、今のプロテスタントにおいては、残念ながら、事実ではないでしょうか。多くのクリスチャンがもうこの世的になっており、人を非難したり、人を許さないことが普通になってきています。もうみことばを行わなくなっているのです。

“3:3 だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守り、また悔い改めなさい。もし、目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。”

主はサルデスの教会に対して、「あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。」と語りました。このことの意味合いは何でしょうか？それは、プロテスタント発足のときの当初の歩み、聖書理解に戻れとの意味合いです。今のプロテスタントは当初の歩みから、とんでもなく、離れたところを歩んでいることを理解すべきです。主の再臨に関する教理をもゆがめ、ルターの時代には、誰一人受け入れなかった教理、キリストが2度にわたって再臨するなどのヨタ話を嬉嬉として受け入れています。また、ルターが命をかけて訴えたカソリックの誤りに目をつむり、あろうことか、カソリックとのエキュメニカルな一致を目指しています。その先鋒が皮肉にもルターの名前を冠したルーテル派であるとは、情けない現状です。

「それを堅く守り、また悔い改めなさい。」

何故ここで、神のことばを堅く守ることが語られているか、というと、もうプロテスタントでは、神のことばから、だいぶ離れた歩みをしているからです。また何故「悔い改めなさい」（方向転換の意）と語られているか、というと今のプロテスタントの歩みをそのまま続け

ていくなら、主の再臨に対応することができず、永遠の命が危ないからです。

そのようなわけで、私たちプロテスタントは、自分の理解で、自己安心をするのではなく、しかし、真に正しい目を持つた、主の目で客観的にこの教会を見るべきです。主は明らかにこの教会に対して、主から当初聞いた歩みからはずれていること、また、その外れた歩みから悔い改め（方向転換）をすることを語られたのです。

決して決して今のままの歩みで問題ない、そのままで、天の御国は約束されているなどとほめてはいないのです。厳粛に警告を受けるべきではないでしょうか。

“もし、目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。”

もし、罪の歩みから、目をさまさないなら、プロテスタントにとって、主の再臨が盗人が来るようなものとなり、主の再臨には決して気づかないことが書かれています。

主の初降臨の日、その来臨に気づかなかった多くの人が滅んでしまいました。パリサイ人も律法学者も聖書の知識として、メシヤ来臨があることはよく知っていました。しかし、彼らはその偽善のゆえ、目の前にいるイエスがそのメシヤであることに気づかず、逆に彼を十字架で殺し、その報いとして、神により、エルサレム崩壊の日滅ぼされてしまいました。逆にメシヤ来臨を悟ったペテロたちは入るべき御国に入りました。同じことが、主の再臨の日に繰り返されるのでしょうか。そして、サルデス、プロテスタントには、その偽善、罪のゆえ、その再臨のキリストのときを理解せず、かつての偽善パリサイ人、律法学者の様な災いに会うことが暗示されているのです。恐れをもって、歩みをただみましょう。この件は、次回また、続きを書きます。終末におけるみこころを行いましょ。一以上一

また、先の創世記に、「**無割礼の男はその民から断ち切られる**」と、書かれています。この御言葉が言わんとしているのも同じことで、「肉」から切り離されていかなければ、「**断ち切られる**」すなわちクリスチャンとして見なされない、結果として御国を受け継がないということを言われています。ですので、私たちは、「肉」から切り離されていかなければいけないのです。「肉」から切り離されることが、御国への条件の一つであることが理解できます。また、私たちを、「肉」へと引っ張る力は思いのほか強いということを理解しなければいけません。それこそ生まれてくる男の子の赤ちゃんがみな、包皮をつけているように、私たちクリスチャンも新生したとはいえ、やはり肉の性質を持っていますので、しかもそれは非常に強いのですので…ゆえに男女問わず、私たちクリスチャンは霊において、あえて意識して、「割礼」を受けるように求めていかなければいけないのです。

「割礼」を受けることにポイントがあることが理解できたかと思いますが、では、実際にどのようにして割礼を受けるのか？について、最後に話したいと思います。とても単純な方法です。それは、「祈り」によって、ひたすら聖霊に触れることです。なぜ、それが良いのか？と、言うところ、このこともレムナントキリスト教会の礼拝で学ばせていただいたことですが…コロサイ人への手紙の2章11、12節に、このように書いているからです。

参照 コロサイ人への手紙 2:11,12

2:11 キリストにあって、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨て、キリストの割礼を受けたのです。

2:12 あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。

11 節の「**割礼**」の言葉に続いて、12 節に「**バプテスマ**」のことが書かれています。「**バプテスマ**」は、“浸される”という意味合いです。つまり多くの水(聖霊)によって、割礼はなされていくのです。ちなみに少しの水ではいけません。以下はエレミヤ牧師がおっしゃっていたことですが…

「割礼」において、「**大量の水**」が必要です。多くの水によって割礼はなされていく、水の量によって決まります。たとえば子どもがドロで遊んでいて服を汚して帰ってきたとします。その時に、たらいに少し水を入れて洗っただけでは思うようにきれいにはなりませんよね。でも、洗濯機の中に大量の水と洗剤を入れて洗えば、汚れはきれいに落ちますよね。「割礼」に関しても、まったく同じ

ことが適用されるのではないかと思います。主に大いに祈り、祈りの中でバプテスマがなされ、割礼を受けていくのです。

私は、こんな風に思います。たとえば聖書には、「自分のことだけでなく、他の人のこともかえりみなさい」ということが書かれています。でも、人のことをかえりみたり、思いやる気持ちを持ち合わせていなかったとします。でも、そこで「生まれつき私はこうなんだから、しょうがないでしょ!」と、あきらめずに、「神様、私は、今は自分のことで精一杯です。でも、イエス様がおっしゃるように、少しでも人のことを考えることができますように」と、そんな風に祈ってみるのです。それも一度や二度ではなく、聖霊によって変えられるまで祈り求めていくのです。そうすると徐々にではあっても、神様の不思議な力によって他の人にも配慮できるように変えられていくのです。私自身がそういったことをいくつか体験させていただきましたのははっきりと申し上げられるのですが祈っていくと、いつしか神様の力や方法によって特別な努力なんてしなくても、あるいは意識しなくても変えられていきます。

たとえば私の生まれつきの性質と言え、引っ込み思案で内向的なタイプです。今でもそういう部分は残っています。人前どころか人と話することすら苦手なタイプなので時折、礼拝の中で証をしたり弟子訓練でメッセージをしたりすることにはとても抵抗がありました。でも、不思議なことに何年と祈りを積んでいく中で徐々に変えられていくようになりました。得意になったか？と聞かれればそうではありませんが、以前に比べたらあまり抵抗なく、人前で話をするできるようになりました。こんなことが参考になるかどうかは分かりませんが、もし、割礼を受けてみよう、そんな風に志を与えられたのであれば、ぜひ、おすすめします。

冒頭にも書きましたように、聖書には私たちクリスチャンが御国に入るための条件、方法について書かれていますので、ぜひ、私たちの側で神様の方法や基準に合わせていきたいと思います。「割礼」を受けること、そして受け続けていくことは、クリスチャン生涯のテーマになっていくと思いますので、これからも祈り求めていきたいと思います。「割礼」を受けて御霊によって歩んで、ぜひ、永遠の命をゲットしていきたいと思います。いつも大切なことを語ってくださる神様に栄光と誉れがありますように。主に感謝して。

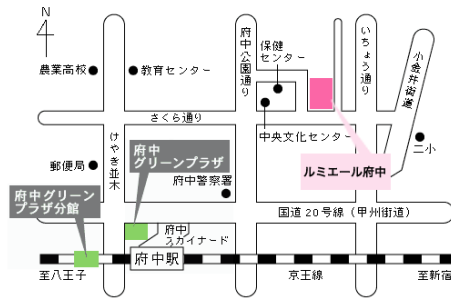
<お知らせコーナー>

- レムナントキリスト教会日曜礼拝：

午前:10:30-12:30, 午後 14:00-16:00

場所：東京、京王線府中駅前、府中グリーンプラザ本館(tel 042-360-3311)

場所の url: http://www.fuchu-cpf.or.jp/green/access/map_02.html



- 「エレミヤの部屋」終末預言解釈 HP （「エレミヤの部屋」で検索下さい）

黙示録、ダニエル書等、あらゆる終末預言に関する解釈を掲載しています。

- 「角笛」終末の警告 HP （「角笛」で検索下さい）

アメリカキリスト教会の背教の実態、悪霊のリバイバルなど、多数の終末関連の翻訳記事あり。

- 「黙示録を読む」無料メールマガジン

まぐまぐ ID:0000007108 毎日配信。終末に関するあらゆるトピックを掲載し、開始後12年、

4000号を超えるクリスチャン向けロングランメールマガジン

- 「トロントブレスingの真実」DVD

多くの人に衝撃を与えたDVD。トロントブレスingとは、ブレスingならぬ

悪霊のリバイバルであることを映像、音声で伝える。価格 1000 円。申し込み先、

レムナントキリスト教会

- 第 30 回黙示録セミナーby エレミヤ

黙示録、ダニエル書等終末に関するトピックを解説するセミナー。

北海道から、広島から熱心なクリスチャンが参加しています。

場所:府中グリーンプラザ本館講習室(7F) 場所は上記。

日時: 2013 年 9 月 15 日(日)PM6:00-8:30

費用:入場無料、ただしテキスト代 1000 円(当日徴収)

定員:20 名(先着申し込み順。満員しだい締め切り)

主催:レムナントキリスト教会(tel 042-306-5002)

申し込み:メールもしくは fax で「名前、住所」記載の上、セミナー参加希望と申し込みください。

Fax 020-4623-5255 e-mail: truth216@nifty.com